

## 生誕160年、益田鈍翁の記憶

DO YOU KNOW 鈍翁? ④

鈍翁の人物像と、鈍翁から始まった小田原の近代茶道の歩みをシリーズで紹介、今回が最終回です。

また、松永記念館では益田鈍翁の特別展が開催中(24日休まで)、8日(土)・9日(日)の「夢見遊山いたばし」でも、鈍翁をしのぶさまざまなイベントが開かれます。

郷土文化館 ☎231377

鈍翁は、板橋の掃雲台やその周辺(石垣山など)に農場や工場を経営しました。農場でできたみかんを缶詰にしてアメリカに輸出したり、掃雲台の敷地内に手織物工場を建てるなど、小田原でいくつもの事業を起こし、中には実験的な事業もありました。「あんなことをやって、採算なんか合うのか」鈍翁の行為に冷たい視線を送る実業家は少なくありませんでしたが、鈍翁は意に介しませんでした。

鈍翁は自家用車として、トヨタや日産の1号車を買って入れて、木炭車に改造して乗っていました。政治家や軍人、富裕層が外国産のガソリン車を乗り回すのを見て鈍翁は戒めます。

「貧乏な日本が、ガソリンなど買うべきじゃない。いつか輸入が途絶えるかもしれないだ…」

それは暗雲垂れ込める日米関係を見据え、国産の技術と産業を興し、輸入を控えようという鈍翁の判断でした。しかし、鈍翁自身は悪化するばかりの日米関係を大いに憂えていたと伝えられています。



掃雲台の缶詰工場にて、後列左端が益田鈍翁

鈍翁は生前「この家(掃雲台)も私一代で終わりです」と語っていたといえます。言葉どおり、今は宅地として分譲され、当時の面影を残すものはほとんどありません。しかし、さまざまな低迷や危機などを乗り切るための知恵として、私たちは「人間・益田鈍翁」を知り、その高い志や偉業を語り継いでいかなければならないのではないのでしょうか。